



Data

監督・製作・脚本：ミシェル・アザ
ナヴィシウス

原案：フレッド・ジンネマン『山河
遙かなり』

出演：ベレニス・ベジョ/アネッ
ト・ベニング/マキシム・エ
メリヤノフ/アブドゥル・カ
リム・マツツエフ/ズク
ラ・ドゥイシュビリ/レラ・
バカガシュヴィリ/マム
カ・マッチティゼ/ルスタ
ン・パレウリゼ

👁️👁️ みどころ

戦後70年間も平和を享受してきた日本では、「チェチェン戦争」の悲惨さは遠い世界のもの。そう思いがちだが、さて現実は・・・？

本作にみる9才のチェチェン人の男の子と、19才のロシア人青年の生きざまをみれば、そんな状況下で人間が生きていくことがいかに大変かがよくわかる。さらに、ヒロインの生きざまをみれば、人間の善意の大切さを痛感！

たまにはこんな難解なテーマにも挑戦して、人間の生き方を考えるきっかけにしなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■あなたは「チェチェン戦争」をどこまで知ってる？■□■

鳩山由紀夫元総理が日本政府の制止を振り切って、ロシアが無理やりウクライナから「併合」したクリミアを訪問したというニュースにはビックリさせられた。3月11日に行われたクリミアの中心都市シンフェロポリでの記者会見で、昨年3月16日にクリミアで実施されたロシアへの編入の是非を問う住民投票について彼が語った、「ウクライナ憲法の規定に従い、平和的かつ民主的プロセスにのっとって行われ、クリミア住民の意思を反映していた」との発言は、明らかに日本政府の見解に反するものだ。したがって、原田親仁駐ロシア大使は11日の記者会見で、鳩山氏のクリミア訪問について「日本政府の立場に著しく反するような言動をされており、大変遺憾に思う」と述べたのは当然だ。このように、ロシアによるクリミアの「併合」とウクライナ問題は目下最大の国際問題だ。

それと同じように、1991年のソ連崩壊をきっかけに、いわゆる「チェチェン戦争」が始まったが、本作は1999年に始まった、いわゆる「第2次チェチェン戦争」を背景

としている。しかし、現在のクリミア問題と同じように、島国日本人の多くは、「チェチェン戦争」についてもほとんど知らないのが実情だ。

本作は、1948年に製作され、第21回アカデミー賞4部門にノミネートされ、原案賞を受賞したフレッド・ジンネマン監督の『山河遙かなり』を原案としているのだが、ほとんどの日本人はそんな映画も知らないはず。本作の鑑賞については、そんな国際問題への関心が不可欠だが、さて・・・。

■□■3人の主人公を、どう受け止める？■□■

本作は『アーティスト』（11年）（『シネマルーム28』10頁参照）で第84回アカデミー賞作品賞、監督賞、主演男優賞などの5冠に輝いたミシェル・アザナヴィシウス監督が、長年「どうしても描きたい」と願っていた物語だそうだ。

本作に登場する主人公は、①両親と声を失くした9歳の少年ハジ（アブドゥル・カリム・ママツイエフ）、②被害者の証言を集めるため、国境から35km離れたロシア連邦イングーシ共和国にある難民キャンプに入っている、35歳のEU人権委員会の女性活動家キャロル（ベレニス・ベジョ）、そして、③ロシア軍に強制入隊させられて、人の心を失くしていく19歳の青年コーリヤ（マキシム・エメリヤノフ）の3人。本作前半では、無残にもロシア兵から父（マムカ・マッチティゼ）、母（ルスダン・パレウリゼ）を殺され、姉ライッサ（ズクラ・ドゥイシュビリ）とも生き別れになるハジの姿が描かれる。ハジは、生きていくためにやむなく幼い弟を捨てたが、ショックのあまり声を失くし、浮浪者のような生活を送ることに。本作中盤では、そんなハジをキャロルが拾い、奇妙な共同生活を送る姿が描かれるが、そんな中でハジとキャロルはいかなる人間的成長を？

他方、チェチェンから遠く離れたまちでお気楽な生活をしていたコーリヤも、手にしていたマリファナのため職務質問され、署に連行された後は、ロシア軍に強制入隊させられてしまったから、大変。旧日本陸軍の訓練もすごかったが、ロシア軍の酷さはそれ以上だ。厳しい訓練の辛さから転属願いを提出すると、コーリヤは散々な暴行を受けたうえ、「希望通り」前線に送り込まれることに。格差社会が広がる日本も大変かもしれないが、第2次チェチェン戦争下における3人の主人公たちは、こんな過酷な状況下で懸命に生きているわけだ。ミシェル・アザナヴィシウス監督が描くそんな主人公たちの姿を、戦後70年間ずっと平和を享受している私たち日本人は、どう受け止めれば・・・。

■□■ハジのつづらな瞳は何を語る？■□■

フランス映画は子役の使い方が絶妙！本作を観て思わずそう思ったのは、ルネ・クレマン監督の『禁じられた遊び』（52年）を思い出したためだ。両親を失った5歳の少女プレットと、村に住む11歳の少年ミシエルの2人を主人公とした同作は、2人だけの「秘密のお墓ごっこ」という「禁じられた遊び」のシーンが印象的で、「反戦」をテーマとした最

高傑作に仕上がっていた。しかし、本作でも400人のオーディションの中から選ばれたという、アブドゥル・カリム・ママツイエフ演じるハジの存在感が際立っている。

とりわけ、前半から中盤にかけては、あまりの恐怖の連続の中で声を失ってしまったハジを演じなければ



◦ La Petite Reine / La Classe Américaine / Roger Arpajou
TOHO シネマズ梅田、TOHO シネマズなんば、TOHO シネマズ二条、シネ・リーブル神戸 ほか PG12

ならないから、ズブの素人には大変だが、それをアブドゥル・カリム・ママツイエフは見事にクリアしている。キャロルが孤児となってさまよっているハジを拾ったのは全くの偶然だが、EU人権委員会の職員としてEU議会で心の限りを訴えても何の反応も示さない人々を見る中、社会的に大きな役割を果たすという自分の夢を追うばかりが能ではなく、ハジの世話をする方が社会の役に立つのでは・・・？キャロルがそう考え始めたのは、ある意味当然だ。結果的に、それを後押しすることになったのは、赤十字の責任者の女性ヘレン（アネット・ベニング）から「報道もされない調査より『彼の面倒を見る方がこの国の役に立つわ』」と冷たく言い放たれたことだが、ハジのつぶらな瞳を見ていると、それだけでキャロルの選択の意味が見えてくるはずだ。

■□人間の善意の大切さを痛感！■□

本作冒頭は、素人のカメラマンのカメラの中に、ロシア兵の手によって、何の罪もないハジの父親がテロリストに仕立て上げられて殺されたうえ、それに抗議する母親まで理不尽に射殺される姿が映し出されていく。家の中から、まだ赤ん坊の弟をあやしながらその一部始終を見ていたのがハジだが、そんな状況になったのは、8年前の独立を認めたくないロシアが、モスクワで起きたテロをチェチェン独立派の犯行と断定し、「対テロ作戦」の名目でチェチェンへ侵攻したためだ。しかし、いくら何でもハジの父親がテロリストとは・・・。

もともと、殺されてしまった父と母の側にいながら、ハジの姉ライッサが辛うじて助かったのは不幸中の幸いだった。しかし、ライッサが家の中に戻ってみると、2人の弟がいなくなっていたから大変。そのため、ライッサは「弟たちを救い、再び会わせてください」

と祈りながら毅然として家を出たが、第2次チェチェン戦争の混乱期中で2人の弟を捜し出すのが至難のワザであることは明らかだ。本作中盤から終盤にかけては、ライッサと2人の弟たちとの再会が実現するのか否かを焦点とするストーリーが進行していくが、そこでは何よりもライッサの意志力の強さがポイントになる。ライッサが頼りにするのはハジの写真のみ。そんなもので姉・弟の再会はととてもムリ。そう思うのが普通だが、さてストーリーの展開は？

そこに絡んでくるのがキャロルやヘレンだが、偶然の積み重ねとはいえ、本作のようにストーリーが展開していくと、人間の善意に大きな意義があることを痛感！社会的に大きな使命をやり遂げる努力も大切だが、それ以上に一人一人が目の前にある自分にできることを果たすのがいかに大切かがよくわかる。

■□■皮肉な巡りあわせだが・・・■□■

軍隊の理不尽さを描いた映画は、仲代達矢主演の『人間の條件』（59～61年）（『シネマールーム8』313頁参照）や勝新太郎主演の『兵隊やくざ』シリーズなどたくさんあるが、本作のコーリヤを見ていると、ロシアの軍隊の理不尽さがよくわかる。もともと『人間の條件』や『兵隊やくざ』では、古年兵のしごきに耐えかねて自殺してしまう兵隊も描かれていたが、本作にみるコーリヤはそんなヤワではなく、ある意味で「急成長」していく姿が興味深い。

クリント・イーストウッド監督の『アメリカン・スナイパー』（14年）では、「伝説の狙撃手」と称えられながら、帰還後PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しむ主人公の姿が描かれたが、厳しいしごきの中で何かが壊れてしまったコーリヤは、ある日上官の命令もないまま、何の罪もない新兵を気絶するまで殴り続けるという暴挙に及ぶことに。こうなると、大佐（ユーリー・ツリロ）から懲罰的に言い渡された「前線行き」の命令も、コーリヤにとっては逆に励みになったのかもしれない。戦闘におけるはじめての人殺しこそ恐怖に震えたものの、戦場における殺人なんて慣れてしまえば屁みたいなもの……。前線の中で兵士として生きていくため次第に人間性を失っていくコーリヤの姿をみていると、悲しくなってくる。もともとよく考えてみれば、これが普通の人間の本来の姿であり、『人間の條件』における梶上等兵は、逆に超人だと言わざるをえない。

しかして、本作ラストは死亡した兵士の身体から時計等の貴重品を奪う兵士の姿が描かれるが、コーリヤの戦利品はビデオカメラ。そのビデオカメラに映るチェチェンの風景はクソみたいなものだが、そのカメラがとらえた村人の尋問風景やテロリストと断定された村民が射殺される風景は、アレレ、これぞ最初の風景……。なるほど、今やコーリヤの人間性はここまで失われてしまっているの……。そんな皮肉な巡りあわせを考えながら、難解なテーマの本作にみる3人の主人公の生きざまを、しっかり考えたい。

2015（平成27）年3月16日記